

親子関係の心理学的分析

小 嶋 秀 夫

子どもの人格の形成に対する親子関係の影響についての心理学的研究は、今世紀の心理学における大きな研究テーマの1つであり、今後も、さかんに取りあげられていく問題であろうと思われる。この隆盛をもたらした原因としては、精神医学、文化人類学、発達心理学、臨床心理学、犯罪心理学、また、一般心理学や社会学などの発展と同時に、実さい的な問題（育児法、非行青少年、家庭や施設の乳幼児や児童の行動障害など）の解決に対する社会的要請をあげることができ。親子関係の科学的研究のカテゴリーに入る研究が出はじめてから60年、本格的な心理学的研究がはじまってからでも、30年以上を経た現在では、この領域に関連する研究の数はきわめて多く、その完全な文献集をつくるのは困難である。

親子関係の研究の目的は一口に言えば、「どのような親子関係をもってきた子どもは、どのような人格をもつようになるか」を明らかにすることである。もちろん、子どもの人格は、親子関係だけによって規定されるものではないから、より正確には、「親子関係は、人格のどの面にどのような規定を与え、また、人格に影響する他の諸要因と、どのような交互作用をもつか。」をあきらかにすることを目的とすると言わなければならない。結局、親子関係の研究は、人格に対する環境的要因の影響の研究の一部をなすものである。

人格の知的側面に対する家庭の影響をさぐる研究は、複雑な問題を含みながらも、比較的斉一な結果を報告している。それに対して人格の情緒的、社会的側面に対する家庭の影響をとり扱う研究は、数も非常に多く、そこで得られた知見は、それなりに、学問上の発展に役立ち、また、実践面でも応用されている。しかし、これらの研究は、少なくとも見かけ上では類似した結果を多く報告すると同時に、一致しない結果をもかなり報告している。関与している変数が非常に多く、しかも、長い時系列を扱おうのであるから、このような結果になるのは当然かも知れない。しかし隣接の先進諸科学はもとより、心理学の他のいくつかの分野と比較しても、この分野の研究が進んでいるとはいえない。この原因の1つは、この分野に注がれている努力を方向づける枠組みが不足していることであると思う。

この小論は、そのような枠組みを提供しようとするものの一つである。ここでは、先行変数である親側の要因の分析に問題を限る。これを明らかにすることが、まず大切だと思うからである。ここでは、まず、親子関係の研究の歴史を概観して、そこにおける問題点をさぐる。つぎに、本論の目的としている親側の要因の分析を試みた研究を概観し、そこから、今後の研究のための研究法の提案をしたい。

第1章 研究の歴史と問題点

1. 1. 育児法の研究（アメリカ）

アメリカで育児法についての関心があらわれてきたのは、前世紀末ころであると考えられ、この関心は、今日行なわれている親子関係の研究の一つの源流であるともいえる。しかし、このころは、アメリカでは、心理学はようやく学問として確立され、研究が拡大しはじめたころであり、育児法の問題にも、心理学が正式に関与することは少なかったようである。アメリカにおいて、育児法に心理学プロパーの知見が関与しはじめたのは、1910年代に発展させられた Watson の行動主義以後のことである。本能を否定し、また、素質的才能をも認めなかったかれは、身体の構造上の差異と、初期の訓練の差異により、その後の行動の差異を説明しようとする環境主義の立場に立った。かれの発達や学習過程についての説明は一般の注意をひいた。本能に関する研究の結論としてのべた、「私に健康で肢体のよく整った12人の赤ん坊と、かれらを育て上げる特別の場所とを与えてもらえば、その中のどの子どもでも、その子の祖先の才能、好み、傾向、能力、職業、人種に関係なく、医者、弁護士、画家、実業家にでも、また、乞食や泥棒までにでも、好きな通りの専門家に仕上げてみせる。」という主張は有名である。(87) これは、すでに学界から退き、著述や通俗的講演をおりにふれ行っていたときの言葉であるが、行動主義の考えは、一般の読者にも大きな影響を与えたものと考えられる。かれの著書 *Behaviorism* は、アメリカの一流新聞が、良書として、強力に一般読者に推したといわれている。Stendler (78) その他 (21, 31, 85, 92) もいうように、1920年代から30年代あたりのアメリカでは、Watson の行動主義に立脚したしつけの考え (88) が主流をなしていたようである。一般に行動は、神経系の中に、ある刺激と反応とを結びつける結合ができることによっておこる。たとえば、赤ん坊が泣くと、すぐにだき上げると、そこに条件づけが成立する。こうすると、赤ん坊は、泣くという反応と、抱き上げられるということとの結合を学習してしまうのであり、いわゆるスポイルされた赤ん坊ができる。かれは、親が子どもに過度の愛情を注いだり、子どもに過度に感情をあらわしたりすることに対して警告した。かれは、早期離乳を主張し、また、赤ん坊の哺乳、睡眠、排泄などが、時間的に条件づけられるために、時間ぎめの保育が必要であるとした。Jersild (43) の研究で面接をうけた母親のうちには、Watson の考えがまだ主流をなしていた時代に、それに従って第1子を育てたことを後悔していたものがあったという。この母親は、一般の育児法の考えの変化のためや、自発的な衝動から、第2子は別のやり方で育てたという。アメリカでの育児法の考え方の主流は、1940年代からは精神分析の方向に向かうが、それは後にのべる。いま、親子関係の研究の源流の1つとして、育児法についての関心をあげ、それに関与した心理学として、Watson の行動主義をあげた。しかし、かれの理論は、育児法の実践には大きな影響を与えたとしても、親子関係の研究自体を大きく促進したとはいえない。しかし、狭い意味での行動主義は解消したとしても、それは発展的解消であり、心理学の体系の中心に織りこまれており、なんらかの意味で

親子関係の研究に関与していることはもちろんのことである。

1. 2. 精神分析学の影響と親子関係の研究

ドイツの客観主義生物学やロシアの条件反射学などの影響をうけながらも、きわめてアメリカ的であった Watson の心理学が、直接には、親子関係の研究を促進させたとはいえないのに対して、ヨーロッパ的な Freud の精神分析学は、アメリカにおける親子関係の研究を大きく促進させた。

Freud は、今世紀はじめころから、乳幼児期の経験が、人格形成に重要な影響をおよぼすことを主張しはじめた。(23, 24) かれは神経症についての臨床経験から、性的体験が重大な病因となることを主張し、また、神経症患者の性行動が小児的な性格を帯びているという観察から、小児期の性の問題への関心を深めたといわれている。1905年の論文では、乳幼児にも性的な衝動を認め、それは、口唇愛期、肛門愛期を経て成人の性愛の段階に達するとのべている。このリビドの発達段階は、のちに、口唇愛期、肛門愛期、男根期、潜在期、性器愛期にわけられるようになる。それぞれの発達段階で、対象リビドの充足に障害があると、リビドの発達が歪められ、人格に障害を残すようになる。ここで、乳幼児期における、本来的に生物学的なリビドの充足を規定する親や社会のあり方が問題にされてくる。これと関連して、男根期におけるエディプス・コンプレックス、エレクトラ・コンプレックスの仮定、人格の発達と深い関連をもつ同一視のメカニズムの考えなどは、人格形成に対する家庭での親子関係の影響に関心を向けさせる役割を果たした。1909年に Freud はアメリカに招かれ、精神分析が正式にアメリカに伝えられた。しかし、アメリカにおける家庭や親子関係の研究に、Freud の影響がよくなって、多くの研究が発表されようになったのは、1920年代に入ってからであり、しかも、心理学者がそれに関与することは少なかった。1920年代に、この領域の臨床的研究を行なったのは、主として、アメリカの精神分析学者である。これらの研究に関しては、Symonds (80) が紹介している。これらの研究により、子どもとの人格形成に対して、家庭、とくに親子関係が占める役割の重要性が明確に認められるようになった。1920年代の終りころには、子どもとの関係における親の行動を記述する次元がだんだん明確化されてきて、今日使用されているのにきわめて近い諸概念がうちたてられてきた。これらの諸概念を明確にしはじめたのは、Levy だとされている。

1930年代になると、この領域に心理学者が積極的に関与してくるようになり、Levy が母親の過保護や拒否についてたてた仮説などが、Witmer のもとで実験的に研究され、親の子どもに対する態度（過保護や拒否）と子どもの問題行動との間に関連があることが見出された。

1939年には、Symonds (80) の研究が発表され、研究史上に1つのくぎりをつけた。かれは、それまでの研究をひろく概観して、親子関係を記述する概念についての理論的考察を行ない、2つの重要な要因、すなわち、受容—拒否、支配—服従を見出した。かれはこの2次元のおのおのについて典型的な親を選び出し、その子どもの行動や親の子ども時代の状態などを調べた。この研究は、事例の選択やデータの収集は、心理学者、カウンセラー、教師などに依頼して行なわれ、

また、対象とした子どもの年齢が広い範囲にわたっていること（受容—拒否の研究では、5才から23才まで）、親や子どもの性別を無視していること、さらに、各次元を、他の1次元をまったく無視して扱ったことなどの種々の欠点はあるにしても、理論的な考察を行ない、科学的方法を本格的に使用した最初の研究であり、その後の研究の大きな足がかりとなった。

1946年には、主として親の権威と幼児の行動・態度との関係を扱ったRadke (64)の研究が発表され、親側の要因や子ども側の要因の測定に一層の進歩が加えられた。その後、関連諸分野の研究が進むにつれて、そしてまた、種々の実際の問題に対する親子関係の影響の重要さが認められるとともに、この領域の研究は、ますます活発に行なわれるようになり、現在でも、毎年多くの研究が報告されている。以上は、アメリカを中心とする研究の歴史であるが、日本でも、戦後この方面の研究がさかに行なわれるようになった。また、イギリス、フランス、オーストラリアやその他の国でも、非行少年や家族の問題を中心とした研究が進められているようである。精神分析の理論は、このように、親子関係の研究のきっかけとなったが、また、育児法の分野で、つよい影響を残した。Stendler (78)によると、アメリカの育児法に精神分析の考えがとり入れられるようになったのは1940年ころであり、許容的な、厳しくないしつけの重要性が強調されるようになった。このことは、Ribble (65)の研究によって、一層強められた。Ribbleは、人格形成に対する乳幼児期経験の重要性を指摘し、赤ん坊の欲するときに母乳を与えること、離乳や排泄のしつけは遅くすることなどを提唱した。

しかし、Freud派の考えが正しいか否かについて、次第に疑問がもたれるようになってきた。Orlansky (62)は、育児法と人格発達との関係についての実験的、半実験的研究の検討を行ない、Freud派の考えを支持しない結論に到達した。問題は、個々の育児法よりも、この育児法と結びついた、あるいはそれを包む親の態度であり、また、子どもの体質や子どもがおかれている全体的な社会的、文化的状況が子どもの行動に影響するのだと考えられるようになった。

1. 3. その他諸分野の影響

1. 3. 1. 文化人類学の影響

子どもの人格形成に対する精神分析的アプローチの限界は、社会と文化の影響の重要性の無視であったとよくいわれる。文化人類学は、Freudの影響をつよく受けた学問の1つであるが、その調査資料が蓄積されるにつれて、人格の文化的、社会的形成因が問題にされるようになった。すなわち、この領域では、精神分析の理論に立ち、民族間の人格の差異を、育児法の差異により説明しようとするものも多く、1930年代から40年代にかけて、この種の研究が多く発表された。しかし、それらの研究では、相互に矛盾した結果も出ており、ある社会での乳幼児期の生理的欲求の充足のあり方と、その社会の成人の人格との間には、精神分析学の主張するような単一な関係は見出しにくいという結果になっているようである。親子関係の研究に対する文化人類学の影響は、文化のちがいによる行動のパターンの差についてのデータを豊富に示して、人格に対する

社会化の影響の重要性を明確に気付かせたところにあるといえる。

1. 3. 2. 発達心理学の影響

発達心理学，児童心理学のある部門は，古くから，子どもの行動に対する環境的要因の探求に関心を示していた。

人格の知的側面に対する家庭の影響を調べる試みは，言語，知能，学業成績などに関して行なわれている。この場合の先行変数としてとり上げられたのは，主として家庭の経済的，物理的，文化的，教育的側面である。心理学的側面は，施設児などとの比較において間接的にとりあげられることはかなりあるが，それを直接的に変数としてとり上げることは少なかった。この種の研究も，素質的要因とのからみ合いが関係し，問題が複雑化し，今後の研究が必要であるが，一般的に，比較的斉一な結果が見出されているようである。

それに対して，人格の情緒的，社会的側面に対する環境的要因の分析は複雑で，まだ十分なしとげられていないが，そのさいに，環境的要因として，もっとも重要なものの1つは家庭であることが認められるようになってきている。

1. 3. 3. 非行青少年その他の研究

Symondsによれば，親の行なう無視と拒否が，子どもの非行の原因になることをはっきりさせたのは，ウィーンの世界分析学者のAichhorn(1)である。また，HealyとBronner(35)も，非行少年の3分の1近くが家庭での情緒的關係で拒否され，愛されず，また，不安定であると感じているとして，家庭生活での情緒的状況の重要性を説いた。また，Glueck夫妻(27)も，親子関係のあり方が非行を規定する重大な要因であることを見出している。このように，非行の発生原因としての家庭の役割がだんだん重視されるようになってきた。

そのほか，施設児などにおけるホスピタリズムの問題，早期に親から離して集団養育をうけた子どもの問題，クリニックを訪れる行動障害児の問題，また，精神病患者の家庭の問題などの多くのことがら，家庭の人間関係の欠陥と関係することが，だんだんわかって来た。これらのことが親子関係の研究を発展させたのは疑えない。

1. 3. 4. S-R分析に基づいた行動分析の影響

1920年代のアメリカの心理学者の理論的関心は学習過程に向けられていた。20世紀はじめの20年間には，Pavlovらの条件反射，Watsonの行動主義，Thorndikeの効果の法則などの考えが発展し，さらに，Tolman(認知説)，Guthrie(S-R;連続説)，Hull(S-R;強化説)らの理論的發展がその基礎となっている。後の3者の理論のうちで，その後，人格の理解に適用するように組織化の試みをうけたのは，Hullの理論であった。親のとり扱いかいによって影響された子どもの行動をとり扱おうという観点からみて，もっとも関連があるのは，Dollard, Miller, やMowrer, Searsなどにより修正され洗練されたHullの理論である。

Dollardらは，Mayによって1933年に設立されたYale大学のInstitute of Human Relationsで訓練をうけたのであり，Hullはその理論的な支えの役割を果たした。そこでは実験

心理学に限らず、社会人類学、精神分析理論への関心も深かった。Dollard (19) らによる要求不満—攻撃の考えも、Freud の理論 (25) から得た示唆を量的にテストできるような形で定式化したものである。Dollard や Miller は、それぞれ、ベルリンやウィーンで精神分析家としての正式の訓練をうけていた。(29) また、Dollard, Miller, Mowrer, Sears などはいずれも、精神分析の概念のS—Rの理論との統合、関連に興味をもち、1940年代には、それに関する論文をそれぞれ独立に、または共同で発表している。ここにおいて、学習心理学の基礎の上に、精神分析学、文化人類学などの諸影響を統合する試みがなされたのであり、人間行動の理解に関して大きな前進がなされた。このことは、親子関係の研究にも影響を及ぼしている。

1950年ころから、親のとり扱いかいによって影響された子どもの行動を学習理論により解明しようとする試みがなされてきている。Miller (55) はシロネズミの実験から、精神分析でいうおきかえ (displacement) の現象を葛藤理論により説明したが、この考えは、Dollard と Miller (20) によって、すべての臨床的に観察された事実に適合するとされた。このモデルは、文化人類学や青少年の攻撃行動に関するデータに適用するさいに、それぞれ発展された。(89, 8) この種のモデルは、子どもの行動の変数を1つしかとり上げておらず、また、S—R 説一般に対する批判の多くも、そのままあてはまるが、親子関係の研究に対する意義ある貢献と評価できる。

Sears は、一般的に言って、Dollard や Miller の理論的立場とかなり一致しており、1950年代に、親子関係の研究者の中で、もっとも大きな業績をあげた人の1人である。

最近、非強化理論の立場の研究で、この領域に関係したものに出てきている。有名な Harlow (30) のサルの実験などがそれであるが、この研究が親子関係の研究にどう貢献するかは、まだ明らかでない。

1. 4. 従来の研究の問題点

以上にのべたような姿で発展して来た親子関係の研究は、毎年多くの研究結果を集積しつつある。今後の研究のために、どのことがらがどのくらい明らかにされたか、また、どの方面の研究がまだ不足しているかを知ることが是非とも必要なのであるが、そのようなリストの作成は極めて困難である。その最大の原因は、研究の手続きが多様で、結果も種々さまざまであるからである。それらの結果の中には、相互に矛盾したものも、また類似したものもある。しかし、それら相互を詳細に検討してみると、矛盾や一致は見かけ上のものである可能性が強く、それから論理的に正しい結論をひき出すことが困難なことが多い。一見矛盾しているようにみえる2つの結果をとってみて比較すると、両者の被験者の質がちがっていたり、子どもや親側の要因を記述する尺度が相違していたりして、両者が果して矛盾しているのか、きめかねることがよくある。また、一見類似した結果を、報告している2つの研究を比較しても、同様の問題があり、結果の類似は、みかけ上のものにすぎないこともある。本論の目的は、すでにのべたように、諸研究を分類・整理して評価するための枠組みの1つをつくることである。

親子関係の研究の目的は、すでに述べたように、「どのような親子関係を持って来た子どもは、

どのような人格をもつようになるか」を明らかにすることである。このためには、1) 親子関係や家庭の記述、および2) 子どもの人格の記述の両者の洗練をはかり、さらに、3) 両者の関係についての研究上の仮説を引き出すような理論体系と、両者の関係をさぐるための方法論の検討が必要とされる。

この中で、とくに早急に整理しなければならないのは、1) であると思う。先行変数が明確に測定されず、研究者によって諸概念がさまざまに使用されているとすれば、見出された結果を相互に比較することは困難である。本論は、このような意味で、親子関係の要因の分析に焦点をしばって考察して行く。

第2章 従来の研究における親子関係の心理学的分析法

2.1. 分析法の分類

従来から、家庭や親子関係の分析には、さまざまな方法がとられて来ているが、ここでは、問題を子どもの態度・行動または人格との関係において家庭を分析しようとする心理学研究に限ることとする。家庭や親子関係の要因として従来扱われて来たものを大別すると4つになる。1) 社会的、文化的要因、2) 家庭、家族の要因、3) 両親の要因、4) 子どもの要因である。私がここで扱おうとするのは、子どもの行動などに、かなり直接的に影響する要因であって、他の間接的要因はかんたんに触れるにとどめておく。はじめに1) から4) までを概観する。つぎに、子どもの行動などを規定するより直接的な要因の研究をややくわしく検討する。

2.1.1. 社会的、文化的要因

家族の社会的階層、文化や下位文化、居住地などの要因と、育児法、しつけ、子どもに対する態度・行動などとの関係、あるいは、それらと子どもの行動との関係を扱おうとする研究は、Mead (54) のサモアにおける青年前期の研究以来、まず文化人類学の分野で発達した。この領域の研究は、1940年ころからの20年間に文化人類学、社会学、心理学の分野で増加し成果をあげてきている。これらの研究によって、子どもの行動に対して、あるいは子どもの行動を規定する家族の要因に対して、どのような社会的、文化的要因が重要であるかを見出すことが可能になってきた。これらの研究はそれ自体として意義をもっているが、これらの要因は、子どもの行動に対する間接的な規定因であり、これらの要因と子どもの行動の間には広いギャップがあり、そのギャップをいかに埋めて行くかについての概念設定が問題になる。

2.1.2. 家族、家庭の要因

家族構成、子どもの出生順序、きょうだいの性や年齢、父母や祖父母の存否、また長期間にわたる父親の不在や母親が働いていることなどの家族の形式的側面の要因、および父母をはじめとする家族間の人間関係、また勢力や権威、役割などの要因が問題にされてきた。これらの要因と育児法や子どもに対する親の態度行動との関係、また、子どもの行動との関係を扱おうとする研究も1940年ころから本格的になってきている。これら諸要因は、社会的、文化的要因と比較すれ

ば、子どもの行動に対するより直接的な規定因であるが、なおその間にいくステップかのギャップがある。この領域の一部を扱った研究に関しては Brim (12) のレビューがある。

2. 1. 3. 親の要因

A. 親の背景的諸要因：たとえば、親の教育程度、親自身がもった親子関係や家庭生活の経験、親の民族的起源、親の子ども時代の家庭の社会階層などの要因を扱った研究は1930年代からあらわれているが、これらの要因と子どもの行動との関係づけを試みるには、何段階かの概念設定または仮説の明確化が必要である。

B. 親の人格、態度、価値観

B₁. 親の人格要因と子どもの人格要因、行動：これは同一視、親の価値観や態度の子どもへの伝達などの研究を目的とするさいには有効であろうが、子どもの行動に対する親の規定因としては間接的なものである。

B₂. 親の人格要因と育児法、子どもへの態度・行動：TAT, SCT, インベントリーや面接などによる性格検査, E スケールやFスケール, 政治や宗教に関する態度尺度などで親を測定し、他方で、親の育児法についての見解、子どもに対する態度・行動を測定し、両者の関係をさぐる研究である。この種の研究では、しばしば両方のデータが同一の親の反応からとられるから、データの混淆がおこり、両者の間に、みかけの上で、不当に高い相関が得られる危険がある。それはともかくとして、この研究は、子どもの行動に対する因果の系列の中で、かなり子どもの行動に近いところに位置する2変数間の関連をさぐるという点で意味はある。

いくつかの研究は、この関連した2変数をさらに子どもの行動に結びつけている。しかし、そのさい、子どもの行動についての情報をも親から得て、データの混淆をきたしたり、また、親の子どもに対する態度・行動の測度が、子どもの行動に対する規定因という点からみて、かなり間接的であったりすることがよくある。

C. 子どもに対する親の態度：子どものとり扱いかいに関する態度尺度またはそれに類するものである。これは、子どもに対する親の一般的な態度、意見、信念、価値観を扱っているから、親が実さいに、子どもに対してとっている態度・行動とは水準をことにする。このことは、親のもつ意見、態度を、直接に子どもの行動と関連づけようとする試みのいくつかが失敗していることの1つの原因であろう。(16, 17, 32, 94) 親が子どものとり扱いかいについて、一般的にもっている意見、態度は、親が子どもに対してとる実さいの態度・行動の背景となるものである。しかし、実さいに測定されたこの意見、態度は、この背景的な態度を推測し、操作的にとり出したものにしかすぎない。実例はのちにとりあげる。

D. 子どもに対する親の態度・行動：ここで、子どもの行動をより直接的に規定する要因が扱われる。くわしくはのちにとり上げる。

D₁. 親の報告によるもの：子どもに対して親が実さいにとっている行動について親が報告するもので、面接法と質問紙法が大部分である。

D₂. 観察者の観察によるもの：子どもに対して、親が実さいにとっている態度・行動について観察者が記述するもので、観察者が家庭訪問して観察するのが多い。ほかに、特定の状況下に親子を入れて、そこでの親子の接触のあり方を記述するものもある。

2. 1. 4. 子どもの要因

A. 親の態度・行動に対する子供の認知：子どものとる行動は、ある程度まで、その子どもがもつ親子関係によって規定されるものだとすれば、その規定を行なうもっとも直接的な要因は、子どもが認知している親の態度・行動であろう。客観的事実のいかんにかかわらず、子どもにとっては、自分の認知している親の姿が現実なのであり、子どもの行動はそれによって規定される。このことは、心理学において、いわゆる現象学的な立場に立つ人々の考えと一致する。かれらによれば、個人が経験し、知覚したことが個人の行動を規定する。この考え方にも問題はあ

1, 人間の行動は意識としてとらえられない要因によっても規定される。

2, 人間の知覚内容と、その人間による知覚内容の報告とが一致しているという保証はない。この不一致は、個人が知覚内容を十分に把握し報告する能力に欠けているとき、および／または、意図的、あるいは無意識的な歪曲がなされる場合である。

1の問題は、当人の認知を問題にする立場からは、なんともできない。この問題は、子どもの認知を扱おうときだけでなく、親や観察者から情報をうるときも同様である。いずれの場合も、この問題がおこりにくくなるように、測定上の工夫がなされている。具体的方法はあとでのべる。ここでひき出そうとする反応は、1つは面接法、質問紙法などにより、子どもが認知している現実的水準での親子関係を測定しようとするものであり、他の1つは、投影的水準の反応をひき出そうとするものである。

B. 子どもの人格要因：子どもの人格や行動を規定する要因の中に、子どもの人格要因を入れることは重複していて無意味のようにもみえる。しかし、ここでとりあげる先行変数は、子どもの外界についての認知、とくにこの場合では、人間関係についての認知の様式に影響する諸要因（動因、要求、認知など）に限る。子どもが親や家族を認知する仕方はなにによって決定されるか——外界の要因か、かれの認知の枠組みか、または両者の相互作用か——を知っておく必要がある。もちろん、先行変数としての子どもの認知も、かれの反応の一部であり、それは親子関係の研究で後続変数である子どもの行動と重複する部分がある。

2. 2. 子どもの行動、人格に影響を与える親子関係要因の心理学的分析法

以上にみて来たように、家庭や親子関係の分析には種々な方法がある。問題を子どもの人格に対する影響の解明におくと、従来とり上げられて来た要因のあるものは直接的な規定因であり、またあるものは間接的な規定因である。間接的な規定因も、結局は、より直接的な規定因の連鎖を通して影響を与えるのだと考えられる。ゆえに、まず親子関係を分析するには、より直接的な規定因の分析を行なう必要がある。従来からの親子関係の研究にもかかわらず、まだ多くのことがらが明らかになっていないままであることの1つの原因は、子どもの行動に対するより直接

的な規定因の分析のあいまいさではないかと思う。本論の目的は、この明確化のために、いくらかでも貢献しようとするのである。

いま、より直接的、または間接的な規定因という言葉を使用して来たが、この直接性——間接性の規定は、とり扱おうとする子どもの行動によってある程度決定される。一般的な関心からいえば、まず子どもの行動、人格をどの局面からとらえ問題にするのが有意味であるかを明確にし、つぎに、それに関連する家庭、親子関係などの要因をさぐって行くのである。たとえば、役割理論、社会的体系の理論と関連して、子どもの行動の記述に、役割の概念が有意味だと考える立場にあっては、従来から、子どもの行動の規定という観点からは、より間接的な要因とされてきたもの——たとえば、2.1.2でのべた家族の形式的諸特性など——が大きくとりあげられることはありうらと思う。

筆者の関心からいえば、子どもの行動に対するより直接的な要因としては、次のものがある。2.1.4Aでのべた子どもの認知している親の態度・行動、2.1.3Dでのべた子どもに対する親の態度・行動が中心となり、さらにそれらと密接に関連している子どもの人格要因(2.1.4B)や子どもの取り扱いに対する親の意見、態度(2.1.3C)である。この節では、それらの諸要因は、従来どのようにして測定されてきたかを検討し、若干の問題点にふれてみる。

2.2.1. 子どもに対する親の態度・行動の分析

2.2.1.1. 親による報告

これは、親が子どもに対して行なっていると自認している態度・行動を質問紙や面接でとらえるもので、この代表的な例は、Radke(64)が幼児の親に用いたものである。彼女は、子どもに対する統制(専制の一民主的)、罰、親子間のラポール、子どもに対する制限(厳しい—弛い)などについての質問項目を用意し親に面接した。たとえば、「私は子どもに対して厳格である。——いつでも、ときに、めったにない」といった項目と選択肢である。この質問の中には、たとえば、「私の子どもは私のいうことをききます。」というような、子どもの親に対する行動についての親の認知も含まれている。Radkeは、親が子ども時代に経験した親子関係をも質問した。また、子どもに、親にきいたのと類似した質問をしたり、写真や人形を用いた親子関係の投影検査を行なっているが、それら相互の測度の関係についての理論は明確にされていない。わが国では、中西昇ら(58)がRadkeの質問項目を使用した研究を報告しており、また、その因子分析もなされている。(60)

Watson(86)は、3段階の多肢選択法による質問紙を用いて、子どもの食事、睡眠、排泄のしつけなど35の日常の状況での親の反応を調べた。反応を記述する次元は、許容—厳格の1次元であり、他の要因については統制された。Watsonはまた、子どもが家庭のしつけをいかに認知しているかを質問して、親の測度と関連づけている。なお、子どもの年齢は5~12才である。

わが国でも、このカテゴリーに属する方法を用いた研究はよくなされている。品川不二郎らの親子関係診断テストの親用、石黒大義ら(39)や大西誠一郎ら(61)の研究はこの例である。

育児法や初期のしつけの研究者が用いた方法も、大部分ここに含まれる。Sewellら(72,73)の研究、Wittenbornら(91)の養子の研究、Searsら(70,71)の幼児の研究は、面接法により育児法を知ろうとした研究の一例である。Searsらの研究は、事実の報告は親がするが、それを理論的に設定された次元に従って、評定者が評定する方法をとっている。

Siegelら(75,76)やHoffman(38)が用いた親の影響技法は、親に面接して、それに先立つ24時間におこった親子間の相互作用をすべてきくものである。これは、意図的、または無意図的な歪曲やいんべい、忘却を少なくする効果をもつ。

現実水準の反応そのものではないが、Morganら(56)の漫画様の絵を用いて、子どもに対する罰を知ろうとするもの、Jackson(42)の用いた仮設的な状況に対する解決を親にのべさせる方法もある。Morganらの方法は、久芳忠俊(48)が用いている。

2.2.1.2. 観察者による分析

Champneyが1937年に企画し、1941年ころから発表されはじめ、その後、Baldwinら(6,7)によって発展させられたFels Parent Behavior Rating Scalesがこの代表的なものである。これは、長期間訓練をうけ、厳密な評定ができるようになった評定者がくり返し家庭を訪問して、観察したり推察したりした結果から、家庭の活動性(活動的—非活動的)、子どもとのラポール(緊密なラポール—孤立)などの家庭の雰囲気や親の態度・行動を評定するものである。Baldwinらは、尺度間の相関や理論的考察から、家庭の民主性、子どもの受容、溺愛、統制、活動性の水準などのsyndromeを見出した。また、Roff(66)はこの30の尺度を因子分析し、子どもに対する関心、民主的指導などの7因子を抽出した。さらにこの1次因子のマトリックスから、LorrとJenkins(51)は3箇の2次因子を見出した。

Lafore(49)は、21の家庭を訪問して親のとり扱いを記録した。彼女は、親を4つのグループに分類した。すなわち、専制者、協力者、月和見主義者、宥和者である。

Buehler(15)は家庭と子どもとの自然的関係をさぐるため、17の家庭で長期間にわたる観察記録をとった。

また、BarkerとWright(9,10)は、子どもの心理学的生態学の研究の中で、家庭における子どもの直接観察を行なっている。

より限定された意味での親子の相互作用の直接観察を試みたものもある。Bishop(11)は観察室に親子を入れて幼児を遊ばせ、親子の相互作用を、一方視窓から観察するという方法をとった。彼女は、母親や子どもの行動を記述するカテゴリーを発展させている。

Smith(77)は、幼児の母子間の相互作用の記述に、Bishopのカテゴリーをほぼそのまま使用したが、Bishopの5秒の観察単位をやめて、行動の系列が明らかになるように記録法をあらためた。

Moustakasら(57)も、Bishopのカテゴリーを参考にして、成人—子どもの相互作用を記述するカテゴリーを発展させた。ここでは、5秒の観察単位が使用された。これらの方法による測

定の信頼性は、それぞれかなり高いと報告されている。

このほか、乳児と母親との接触の観察については、Escalona (22) の研究をはじめ、2.3が報告されている。わが国では、牛島義友ら (84) や杉溪一言ら (79) が長時間観察記録を行なっている。

2.2.2. 子どものとり扱いかいについての親の態度・意見

これは、親の現実行動の水準でなく、態度または意見の水準を測定しようとするものである。この代表的なものは、Schaefer らによって、1957年ころから発表されはじめ、最近よく使用されている PARI (Parental Attitude Research Instrument) である。これは、「子どもの考えがよい場合には、子どもが両親のいうことに反対しても許してやるべきである。」という陳述に対して、親に、「大いに賛成、どちらかといえば賛成、どちらかといえば不賛成、大いに不賛成」という4つの選択肢のうちの1つを選ばせるものである。PARIの因子分析は Schaefer その他によって報告されている。(67.68.93) PARIの得点の分散の大部分は、愛情-敵意、自律-統制の2因子で説明されるとしている。Schaeferら (68) は、Guttman の radex theory (1954) により、母の行動(ただし、態度、意見の水準)の circumplex model を提唱している。PARIは、その後も反応セットの影響を除くためなどの研究が行なわれ、測度としては、だんだん洗練されてきている。この実際の妥当性に関するデータの決定的なものはまだないが、この得点と子どもの行動と直接関連づけようとした研究の1つが有意な関係を見出さなかったことは、先にものべた。反応の水準が問題になる。PARIは、わが国では、小林利宣 (47) その他の研究者が試用している。

Shoben (74) の態度尺度は、Schaefer らの基本ともなったもので、支配、占有、無視に関する148項目からなり、親は4段階の反応をする。Gordon (28) は幼児の親にこの尺度を施行し、キャンプにおける母子の接触場面での行動を観察した結果とを比較したが、両者の間に一貫した傾向がみられなかった。

Trapp ら (81) は、支配の次元に関する両親の態度を16事例についてしらべ、子どもの成人との接触をさける行動との間に有意な関係を見出した。

Little ら (50) は、態度一般ではなく、実験的状況下での子どもの成就に対する母親の期待得点を、ぜんそくの子どものとそうでない子どもの母親に施行して比較している。

このカテゴリーに属する測度を用いて子どもの行動との関連を調べようとするさい、とくに精密な態度測定を用いた研究において、両者間に一貫した関連を報告することが少ないような印象をうけるのは興味をひく。しかし、これは、子どもの測度や標本の問題とも関連するので、すべてを反応水準の問題に帰すのは早計である。そもそも、親の測度と、子どもの測度との間に、確実に関連が存在すると期待する根拠はない。そのような関連があるかどうかを知るために、研究が進められているのである。そのためには、多くの変数を統制する努力が必要である。

2.2.3. 親の態度・行動についての子どもの認知

2.2.3.1. 現実水準における子どもの報告

子どもに面接したり，質問紙に反応させたりして，子どもが親をどのように認知しているかを知ろうとするものである。Radke (64) は幼児につきのような質問をしている。「あなたが悪いことをしたとき，お母さんはどうしますか。」彼女は，子どもの反応と，母親の反応の比較をしている。

Brown ら (14) は10才児に質問紙を適用し，親の仕事や遊びへの参加，是認一否認などの面に関して，子どもに，「非常によくある」から「めったにない」までの5段階評定をさせた。研究者が別に，いくつかの家庭を選んで評定したところ，両者はよく一致した。

Ausubel ら (4) も，子どもに，親の行なう受容一拒否，本質的—非本質的評価の次元から親を評定させている。

Hawkes ら (34) は，青年前期の子どもに，子どもの行動に対する親の反応についての質問を發し，多肢選択法で反応させている。

Lyle ら (52) は，grade school の子どもに，親が行なう罰についての報告をきいた。「自分の思うとおりにさせるために，私の両親は——。」といった空白をうめさせるのである。

品川不二郎らの親子関係診断テストの子ども用は，このカテゴリーに入る。

林勝造，一谷彊と筆者 (40) が現在発展させつつある検査もこのカテゴリーに入る。これは，ハーフ・トーンの絵を使用したP—F Study形式のものであるが，得ようとしている反応は，現実的水準の反応である。画面の左の子どもが，右の親に対して，種々の要求を出しており，それに対して親がどう答えるかを子どもに書かすのである。質問紙を用いずに，絵を用いた根拠は次のようなものである。（これはCCP検査として近く発表される。）

1. 質問紙では明確に規定しにくい場面の決定因をより明確化することにより，子どもがより現実的な反応をなしえるようにする。

2. 場面の決定因を明確化しながら，他方においては，絵はできるだけ多義的にして，反応の自由度を高め，現実の親の反応を出やすくする。

3. 言語刺激だけでは，概念的，抽象的となり，防衛機制などにより歪曲された反応が得られるのを防ぐ。

子どものなした反応は，子どもの欲求に対する受容—拒否の次元を中心にした評点組織により評点される。

親子の対でなく，家族全体のダイナミックスをとらえようとしたものには，Lippitt らが試らみている。辻正三らが1952年ころから発表しはじめている家族好性順位法（家族を好きな順にならべさせる）や NCT (83) も，家族のダイナミックスにせまろうとしたものである。

親子関係の研究において，親側の変数と子ども側の変数とを関連づけるさい，データの混淆に注意すべきことは何回かのべてきた。両方のデータを，同一人から得た場合には，両者の連関が

不当に高くなる可能性がある。筆者自身の経験からいっても、また、多くの研究者の結果をみても、このことがいえる。Hoffman と Lippitt (37) は、Helper ら (36) の研究と、Jourard ら (45) の研究を比較している。Helper らは、中学生の好意と受容に関して、親および子どもに評価させたが、両者の行なった評価の間の相関はきわめて低かった。それに対して、Jourard らの場合は、親が行なう評価をも子どもに報告させたところ、2つの評価は高い相関を示した。Lippitt らは、後者の研究で高い相関が見出されたのは、データをすべて子どもからとったためであると認めながらも、親の行動は親の知らない様式で子どもに知覚されるから、親の報告より子どもの報告のほうがより正確であるといっている。子どもの知覚内容とその報告とのギャップがないと仮定すれば、Lippitt らの意見は、子どもについての評定の問題に対しては正しい。しかし、先行—後続変数関係を問題にし、前者を子どもの知覚により測定し、後者を子どもの特性などについて測定（この場合、観察者が子どもの人格特性を評定するとしても以下の問題から免がられない）する場合には、次のような問題が出てくる。すなわち、子どもの認知を通して見た親の態度・行動は、それ自体、子どもの反応の一部であり、したがって、それは後続変数である子どもの行動のあるものとの相関が高まるであろう。

親が実さいどう行動していようと、また、子どもの認知の様式に歪曲があるのであろうと、とにかく子どもが親の態度・行動に対してもっている認知が、子どもの行動をつよく規定する点から考えて、子どもの認知している親の姿を正確にひき出す測度は有効である。しかし、上述のような問題や、また、子どもの認知している親子関係の改善の問題を考えると、子どもからだけではなしに、親や観察者からもデータをひき出す必要が出てくる。この問題に関しては3章で触れることにする。

2.2.3.2. 親子関係に関する投影検査

これについては、かんたんに触れておく。これには、多種多様の方法が用いられており、反応の水準も様々であるし、それらと現実との関連についての統一的な見解はないようである。1つの検査に対しては、すべての人の反応水準が等しく、かつ研究者は、それがどの水準の反応であるかを知っている必要がある。あるいは、等しくない水準の反応が出る場合には、研究者はその弁別が可能でなければならない。

TAT, CAT, Blacky がそのまま使用されることもある [Ausubel ら (4)] し、また、TAT形式の図版を新たに制作するものもある。[Alexander (2), Jackson (41), Kagan (46), Travis—Johnson Projection Test (82)] また、P—F様式の絵を使用するもの [Williams (90)], 写真を使用するもの [Radke (64), 中西 (59)], 映画を使用するもの [Fulchignoni (26)], もある。Ausubel や Harris ら (33) は、物語り完成法を用いている。さらに子どもの行動や人形遊びでの行動 [Ammons (3)] や作品を使用するもの [Porot (63)] など、さまざまである。

第3章 今後の研究方法

前章でみたように、親子関係の把握には多くの方法があるが、現実に機能している親子関係を記述し、それと子どもの行動との関連をさぐるには、親子関係をただ1つの方法のみで記述するのは不十分である。なぜなら多くの先行変数は、後続変数との間にギャップがあり、その間に関連づける概念が必要である。また、子どもの行動に対して、より直接的な規定因である子どもの認知も、そのみでは不十分であることは先にのべた。

さらに、具体的な問題として、実さいの親子関係において、親が認知している関係と、子どもが認知している関係とは、しばしばくいちがっており、しかも、親も子どもも、それぞれの認知に規定されて行動するのである。この意味で、ある親子関係を、親、子、観察者の立場からみれば、どのようであるかを明らかにし、もし、相互の認知の間に差異があれば、その差異がどのように仿らるかを明らかにする必要がある。また、親や子どもの内部で、意見や態度、現実、投影などの反応水準の間に、差異があるかどうかを見出すことも意味がある。このような意味で、親子関係を総合的に把握する必要がでてくる。そのためには、どのような手続きをとればよいかを考えてみる。

1. 現実水準での親子関係を3つの観点(①親による報告、②観察者による観察、③子どもによる報告)から測定する。このさい、それぞれの観点において、親子関係を記述するのに、もっとも有用で、意味のある次元を使用する必要がある。例えば、親の報告を記述するのに有用な次元が、他の観点からみた親子関係を記述するのに有用で意味があるとは限らない。おのおのの観点において有意な記述が得られ、かつ、おのおのの内部において、記述に法則性と内的秩序があることを確かめる。

2. おのおのの観点からの親子関係の記述の間に有意で予見可能な関係があるかを確かめる。1と2の目的を達成する手段として、因子分析は有用なもの1つであろう。まず、1の課題をなしとげるために、親と子、観察者の観点から得た3種のデータを別々に分析する。もし、それぞれの分析から類似した因子構造が見出されたとしても、3つの観点が類似したものを測定しているとはいえない。従来、この点の検討があいまいであったと思う。親と子の認知の差を副次的に扱った研究については、折にふれ言及して来たが、そこでは、差の有無を単純に考える傾向があった。たとえば、親も子に愛情をもっていると考え、子どもも、愛情をもった親だと認知していたとしても、その「愛情」が同じものでなければ、親—子の認知の差を云々しても無意味であろう。このような単純な比較ができるのは、たとえば、親は1日に何回子どもをなぐったかとか、親は毎日子どもの勉強を教えるかといった具体的な行動が問題になっているときに限られる。

親のいう愛情と子どものいう愛情とが、同じ次元のものであるかということ、すなわち、見出された因子構造の類似性のいかに確かめる1つの方法は、親子関係についてのそれぞれの観点からの記述を因子分析し、対応すると考えられる因子の因子得点を個々の事例について算出し、

その相関を求めることであると考えられる。

さらに、次のような手段も考えられる。個々の親が、子どもに対してとっている態度を、3つの観点から測定し、それらの測度をバッテリーとして因子分析することである。これは、心理治療におけるカウンセラー、クライアントの関係の分析に使用されている。(18)

3. 親子どもそれぞれにおいて、親子関係についての態度、意見水準（これは主として親側において意味のあるものである）および投影水準（これは主として子ども側において意味のあるものである）の反応、さらには、親や子どもの人格要因（とくに対人行動の認知と関係する人格要因）を測定し、それと1での記述と対応づけ、1での記述の背景となるものをさぐる。

4. 親や子どもをとりまく家庭、社会、文化などの要因の測定、さらには、親の人格形成に影響を及ぼした諸要因を把握して、3および1での記述との関連を見出すこと。

以上のような手続きをとり、それらを総合的に検討して、因果関係の系列をあきらかにすることにより、親子関係のより十分な把握に近づけると考える。

以上の1から4までのステップをとるさいに注意すべき問題をあげてみる。

A. 時間軸の問題： 上述の1と2のステップは、比較的短い時間内における、いわば静止した状態の記述であるが、発達的に、1と2でのべたパターンが、どのように変化するかについてのノーマティブな研究が必要である。家庭や親子関係のあり方は、子どもの成長発達とともに変化して行くのは当然であるからである。ステップ1でのべた、個々の観点からみた親子関係の記述についてのノーマティブなデータはきわめて少ない。とくに同一の事例を縦断的に追跡した研究はほとんどない。Schaeferら(69)の研究や、あと1,2しか筆者はみていない。

同一の子どもではなく、種々の年齢層の子どもに対するノーマティブ・スタディも少ない。Harrisら(33)や辻ら(83)などの、家族のうち、だれに子どもが好意をもつかというデータが中心である。Baldwin(5)は、3才児と9才児に対する親の行動の差異を調べた。林、一谷、小嶋らの未発表のデータは、小学校2年から中学校3年までの子どもの父母の態度・行動に対する認知の変化を調べている。文化的要因の1つである育児法の考え方の変化についてはアメリカでの研究があることはすでに述べた。この領域では、Bronfenbrenner(13)の研究がある。

B. 親子関係の把握の局面

親子関係は種々の局面から把握できる。上述のステップ1で、「それぞれの観点で有用で有意義な記述」といったが、その有用で有意義な記述とは、いかなる基準にもとづいているものであろうか。それは研究の目的によってことなるといえる。臨床的な関心から言えば、子どもや親にとって、真に意味のある対人関係の記述が問題になるであろう。他の研究的な目的が関与してくると、これ以外の基準が出てくる可能性がある。1つは、子どもの行動や人格のどの面に関心を向けるかということである。研究の対象とする子どもの行動がかわれば、その先行変数である親子関係の記述の観点もことなってくるであろう。

他の1つは、先行変数と後続変数との関連についての仮説をひき出してくるもとなる理論に

よる。その理論が、人格形成や行動をどの局面でとらえようとするかによって、有意義な親子関係の局面もことなってくる。これからの研究で、われわれがどのような理論に立つかが問題となる。理論から仮説をひき出し、それに従って研究方法をも発展させて行く必要がある。

- 1) Aichhorn, A. *Wayward youth*. (English translation) New York : Viking, 1925.
- 2) Alexander, T. The adult-child interaction test : a projective test for use in research. *Monogr. Soc. Res. in Child Develpm.*, 1952, 17, No. 2, 1—40.
- 3) Ammons, R. B., and Ammons, H. S. Parent Preference in young children's doll-play interviews. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 1949, 44, 490—505.
- 4) Ausubel, D. P., Balthazar, E. E., Rosenthal, I., Blackman, L. S., Schpoont, S. H., and Welkowitz, J. Perceived parent attitudes as determinants of children's ego structure. *Child Develpm.*, 1954, 25, 173—183.
- 5) Baldwin, A. L. Differences in parent behavior toward three- and nine-year old children. *J. Pers.*, 1946, 15, 143—166.
- 6) Baldwin, A. L., Kalthorn, J., and Breese, F. H. Patterns of parent behavior. *Psychol. Monogr.*, 1945, 58, No. 3, 1—75.
- 7) Baldwin, A. L., Kalthorn, J., and Breese, F. H. The appraisal of parent behavior. *Psychol. Monogr.*, 1949, 63, No. 4, 1—85.
- 8) Bandula, A. and Walters, R. H. Adolescent aggression. A study of the influence of child-training practices and family interrelationships. New York:Ronald, 1959.
- 9) Barker, R. G., and Wright, H. F. Psychological ecology and the problem of psychosocial development. *Child Develpm.*, 1949, 20, 131—143.
- 10) Barker, R. G., and Wright, H. F. *Midwest and its children*. Evanston, Ill. : Row, Peterson, 1954.
- 11) Bishop, B. M. A study of mother-child interaction. *Psychol. Monogr.*, 1951, 65, No. 11.
- 12) Brim, O. G., Jr. The parent-child relation as a social system: I. Parent and child roles. *Child Develpm.*, 1957, 28, 343—364.
- 13) Bronfenbrenner, U. Socialization and social class through time and space. in Mccoby, E. E., Newcomb, T. M. and Hartley, E. L. (Eds.), *Readings in social psychology*. New York:Holt, 1958, 400—424.
- 14) Brown, A. W., Morrison, J., and Couch, G. B. Influence of affectional family relationships on character development. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 1947, 42, 422—428.
- 15) Buehler, C. *The child and his family*. (English translation) London : Routledge, Kegan Paul, 1940.
- 16) Burchinal, L. G., Hawkes, G. R., and Gardner, B. The relationship between parental acceptance and adjustment of children. *Child Develpm.*, 1957, 28, 65—77.
- 17) Burchinal, L. G. Parents' attitudes and adjustment of children. *J. genet. Psychol.*, 1958, 92, 69—79.
- 18) Cartwright, D. S., and Roth, I. Success and satisfaction in psychotherapy. *J. clin. Psychol.*, 1957, 13, 20—26.
- 19) Dollard, J., Doob, L. M., Miller, N. E., Mowrer, O. H., and Sears, R. R. *Frustration and aggression*. New Heaven: Yale Univer. Press, 1939.
- 20) Dollard, J., and Miller, N. E. *Personality and psychotherapy*. New York : McGraw-Hill, 1950.
- 21) Escalona, S. A commentary upon some recent changes in child rearing practices. *Child Develpm.*, 1949, 20, 157—163.
- 22) Escalona, S., Leitch, M., et al. Early phases of personality development : a non-normative study of infant behavior. *Monogr. Soc. Res. in Child Develpm.*, 1952, 17, No. 54, 1—72.
- 23) Freud, S. *Die Traumdeutung*. 1900. *Ges. Werke*, Bd. 2. u. 3. London : Imago, 1942, 1—642.
- 24) Freud, S. *Drei Abhandlungen zur Sexualtheorie*. 1905. *Ges. Werke*. Bd. 5. London : Imago, 1942, 27—145.

- 25) Freud, S. Trauer und Melancholie. 1916. Ges. Werke, Bd. 10. London : Imago, 1946. 428—446.
- 26) Fulchignoni, E. Examen d'un test filmique. Paris : Bureau international de Filmologie. (63. による)
- 27) Glueck, S., and Glueck, E. T. Unravelling juvenile delinquency. Cambridge, Mass. : Harvard Univer Press, 1950.
- 28) Gordon, J. E. The validity of Shoben's Parent-Attitude Survey. *J. clin Psychol.*, 1957, 13, 154—158.
- 29) Hall, C. E., and Lindzey, G. Theories of personality. New York : Wiley, 1957, 420—466.
- 30) Harlow, H. F. The nature of love. *Amer. Psychologist*, 1958, 13, 673—685.
- 31) Harris, D. B. Social change in the belief of adults concerning parent-child relationships. *Amer. Psychologist*, 1948, 3, 264.
- 32) Harris, D. B., Gough, H. G., and Martin, W. E. Children's ethnic attitudes : II. Relationships to parental beliefs concerning child training. *Child Developm.*, 1950, 21, 169—181.
- 33) Harris, D. B., and Tseng, S. C. Children's attitudes toward peers and parents as revealed by sentence completions. *Child Developm.*, 1957, 28, 401—411.
- 34) Hawkes, G. R., Burchinal, L. G., and Gardner, B. Pre-adolescents' views of some of their re'ations with their parents. *Child Developm.*, 1957, 28, 393—399.
- 35) Healy, W., and Bronner, A. F. New light on delinquency and its treatment. New Heaven : Yale Univer. Press, 1936.
- 36) Helper, M. Parental evaluation of children and children's self-evaluation. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 1958, 56, 190—194.
- 37) Hoffman, L. W., and Lippitt, R. The measurement of family life variables. in Mussen, P. H. (Ed.) *Handbook of research methods in child development*. New York : Wiley, 1960, 945—1013.
- 38) Hoffman, M. L. Power assertion by the parent and its impact on the child. *Child Developm.*, 1960, 31, 129—143.
- 39) 石黒大義, 藤原喜悦 溺愛, 放任, 専制 児童心理, 1954, 8, 226—235.
- 40) 一谷彊, 林勝造, 小嶋秀夫 親子関係テスト (PCRT) 作成の試みとそれによる診断—特に Case study よりみた PCRT の臨床的妥当性について—京都学芸大学教育研究所所報, 1962, 8, 67—77.
- 41) Jackson, L. A test of family attitudes. London : Methuen, 1952.
- 42) Jackson, P. W. Verbal solutions to parent-child problems. *Child Developm.*, 1956, 27, 339—351.
- 43) Jersild, A. T., Woodyard, E. S., and del Solar, C. F. Joys and probemls of child rearing. New York : Bureau of Publications, Teachers College, Columbia Univer. 1949. (44による)
- 44) Jersild, A. T. *Child psycholgy*. 5th Edtion. Englewood Cliffs, N. J. : Prentice-Hall, 1960.
- 45) Jourard, S. M. and Remy, R. M. Perceived parental attitudes, the self, and security. *J. consult. Psychol.*, 1955, 19, 364—366.
- 46) Kagan, J. Socialization of aggression and the perception of parents in fantasy. *Child Devlpm.*, 1958, 29, 311—320.
- 47) 小林利宣 PARI スケールによる親の態度 日本心理学会第24回大会発表論文集, 1960, 323.
- 48) 久芳忠俊 母親—子供罰場面における攻撃方向と型について, 心理学評論, 1959, 3, 74—84.
- 49) Lafore, G. G. Practices of parents in dealing with preschool children. *Child Developm. Monogr.*, 1945, 31, 3—150. (44による)
- 50) Little, S, and Cohen, L. Goal-setting behavior of asthmatic children and thir mothers for them. *J. Pers*, 1951, 19, 376—389,
- 51) Lorr, M, and Jenkins, R. L. Three factors in prent behavior. *J. consult. Psychol.*, 1953, 17, 306—308.
- 52) Lyle, W, H., and Levitt, E. E. Punitiveness, authoritarianism and parental discipline of grade school children. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 1955, 51, 42—56.
- 53) 丸井文男 家族関係の一診断法の試み—TATによる感情関係の把握—名古屋大学教育学部紀要, 1957, 3, 340—345.
- 54) Mead, M. Coming of age in Samoa. New York : Morrow, 1927.
- 55) Miller, N. E. Theory and experiment relating psychoanalytic displacement to stimulus-response generalization. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 1948, 43, 155—178.
- 56) Morgan, P, K., and Gaier, E. L. Types of reactions in punishment situations in the mother-child relationship. *Child Developm.*, 1957, 28, 161—166.

小嶋：親子関係の心理学的分析

- 57) Moustakas, C. E., Siegel, I. E., and Schalock, H. D. An objective method for the measurement and analysis of child-adult interaction. *Child Developm.* 1956, 27, 109—134.
- 58) 中西昇, 小西勝一郎, 谷嘉代子 親子関係の心理学的研究 大阪市立大学家政学部紀要1953, 1, 183—223.
- 59) 中西昇, 村尾能成 親子関係の心理学的研究(第二報告)一投影法による児童の人格診断についての研究—大阪市立大学家政学部紀要 1954, 2, 259—270.
- 60) 中西昇, 親子関係の心理学的研究(第八報告)一子どもに対する親の態度の因子分析的研究—教育心理学研究, 1958, 6, 153—158.
- 61) 大西誠一郎, 石黒大義, 大橋正夫, 旭好子 家庭関係と人格形成—家庭関係と幼児の人格(第三報告)一名古屋大学教育学部紀要, 1957, 3, 134—141.
- 62) Orlansky, H. Infant care and personality. *Psychol. Bull.*, 1949, 46, 1—48.
- 63) Porot, M. L'enfant et les relation familiales. Paris: Presses Universitaires de France, 1959.
- 64) Radke, M. J. The relation of parental authority to children's behavior and attitudes. Minneapolis: Univer. Minnesota Press, 1946.
- 65) Ribble, M. A. Infantile experience in relation to personality development. in Hunt, J. McV. (Ed.) *Personality and the behavior disorders*. Vol. II New York: Ronald, 1944, 621—651.
- 66) Roff, M. A factorial study of the Fels Parent Behavior Scales. *Child Developm.*, 1949, 20, 29—45.
- 67) Schaefer, E. S., and Bell, R. Q. Patterns of attitudes toward child rearing and the family. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 1957, 54, 391—395.
- 68) Schaefer, E. S. A circumplex model for maternal behavior. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 1959, 59, 226—235.
- 69) Schaefer, E. S., and Bayley, N. Consistency of maternal behavior from infancy to pre-adolescence. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 1960, 61, 1—6.
- 70) Sears, R. R., Whiting, J. W. M., Nowlis, V., and Sears, P. S. Some child-rearing antecedents of aggression and dependency in young children. *Genet. Psychol. Monogr*, 1953, 47, 135—236.
- 71) Sears, R. R., Mccoby, E. E., and Levin, H. Patterns of child rearing. Evanston, Ill.: Row, Peterson, 1957.
- 72) Sewell, W. H. and Mussen, P. H. The effects of feeding, weaning, and scheduling procedures on childhood adjustment and the formation of oral symptoms. *Child Developm.* 1952, 23, 185—191.
- 73) Sewell, W. H., Mussen, P. H., and Harris, C. W. Relationships among child training practices. *Amer. sociol. Rev.*, 1955, 20, 137—148.
- 74) Shoben, E. J. The assessment of parental attitudes in relation to child adjustment. *Genet Psychol. Monogr.*, 1949, 39, 101—148.
- 75) Siegel, I. E., Hoffman, M. L., Dreyer, A., and Torgoff, I. Influence techniques used by parents to control the behavior of children: a case representation. *Amer. J. Orthopsychiat.*, 1957, 27, 356—364.
- 76) Siegel, I. E. Influence techniques: a concept used to study parental behaviors. *Child Developm.*, 1960, 31, 799—806.
- 77) Smith, H. A comparison of interview and observation measures of mother behavior. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 1958, 67, 278—282.
- 78) Stendler, C. B. Sixty years of child training practices. *J. Pediat.*, 1950, 36, 122—136.
- 79) 杉溪一言, 小島謙四郎, 竹下由起子 家族関係の研究 II. 一母親の行動観察規準の設定について—第21回日本心理学会大会発表論文抄録, 1957, 180—181.
- 80) Symonds, P. M. The psychology of parent-child relationships. New York: Appleton-Century-Crofts, 1939.
- 81) Trapp, E. P., and Kausler, D. H. Dominance attitudes in parents and adult avoidance behavior in young children. *Child Developm.*, 1958, 29, 507—513.
- 82) The Travis-Johnston Projection Test. Glendale, Calif.: Griffin-Patterson, 1949.
- 83) 辻正三 家族関係の心理学的分析一二, 三の側面とその調査法—東京都立大学創立十周年記念論文集(人文篇) 1960, 105—176.
- 84) 牛島義友, 横張和子 施設と家庭における保育態度の研究, 児童心理, 1953, 7, 806—813.
- 85) Vincent, C. E. Trends in infant care ideas. *Child Developm.*, 1951, 22, 199—209.

京都大学教育学部紀要Ⅷ

- 86) Watson, G. Some personality differences in children related to strict or permissive parental discipline. *J. Psychol.*, 1957, 44, 227—249.
- 87) Watson, J. B. *Behaviorism*. New York : Peoples Institute, 1925. (邦訳による)
- 88) Watson, J. B. *The psychological care of the infant and child*. New York : Norton, 1928.
- 89) Whiting, J. W. M., and Child, I. L. *Child training and personality : a cross-cultural study*. New Heaven : Yale Univer. Press, 1953.
- 90) Williams, W. C. The PALS Tests : a technique for children to evaluate both parents. *J. consult. psychol.* 1958, 22, 487—495.
- 91) Wittenborn, J. R. A study of adoptive children. *Psychol. Monogr.*, 1956, 70, 93—115.
- 92) Wolfstein, M. Trends in infant care. *Amer. J. Orthopsychiat.*, 1953, 23, 120—130.
- 93) Zuckerman, M, Ribback, B, B., Monashkin, I., and Norton, S. A., Jr. Normative data and factor analysis on the Parental Attitude Research Instrument. *J. consult. Psychol.*, 1958, 22, 165—171.
- 94) Zuckerman, M., Barrett, B. H., and Bragiel, R, M. The parental attitudes of parent of child guidance cases : I. Comparison with normals, investigation of socioeconomic and family constellation factors, and relation to parents' reactions to the clinics. *Child Developm.*, 1960, 31, 401—417.